

PSⅡ-7 河川を軸とした都市景観の変遷に関する研究

地域交流センター 正員 小山隆春
長岡技術科学大学 正員 小池俊雄
長岡技術科学大学 正員 後藤 巖

1. はじめに

単目的の機能の重視という考え方によって発展してきた今日の都市は、複雑でわかりづらくなっている。都市空間における「わかりやすさ」は、生活の利便性や防災面、あるいは地域コミュニティの形成にとって大変重要な役割を担っており、これから、さらに、わかりやすい都市づくりの重要性が増してくる。その場合、現在の過密都市ができる過程を視覚的に捉え、都市空間の「わかりやすさ」の変遷をたどることは、これからの都市づくりにとって必要である。

2. わかりやすさ

K. リンチは都市の形態が及ぼす要因として、アイデンティティ、ストラクチャーを取り上げて、米国の3都市のわかりやすさを分析している。わかりやすい都市とは、都市の各部分の認識が容易であり、それらからたやすく全体的なパターンへとまとめられるものである。

ところで、空間の構成要素は、ヒエラルキー的な構造をもついくつかのスケールで考えることができる。各空間スケールには、その大きさに依存した空間構成要素が存在し、例えば、建物、公園、河川などは、各スケールに応じた構成要素を担う構造物と考えられる。

3. 河川が担う構成要素

河川には、過密化した都市において貴重な空間である水辺の自然性やオープンスペースが存在し、一方、社会基盤整備では総合的な雨水対策、ウォーターフロント開発、河川の再生をきっかけにしたまちづくりなど、さまざまなかたちで都市と人間と河川が総合的に関わり始めている。これらの理由から都市空間において重要な役割を担うものとして河川を選択した。

では、河川が担う構成要素とは何か、それについて以下で説明する。

①境界：昔から日本の河川は両側の生活空間の境界であった。「川向こう」「対岸の火事」などの言葉があるように、一つ的生活空間の中心からみれば、周端部であった。

②焦点・中心・目標：遠くからでも見える特徴ある河川は注意の集中する焦点であり、日本的な広場として使われていた橋詰は生活空間の中心的な役割であり、川向こうにいく場合一つの目標が橋であったりする。

③方向：水源と河口を結ぶ連続した河川には、「上流と下流」「川上と川下」という方向性が存在している。

4. 解析の概要

歴史的資料が豊富で、治水対策に関する社会的関心の高い東京都市河川の代表である神田川を対象に、1万分の1の地形図から、河川を中心とする景観の透視図を作成した。その場合、地域コミュニティの形成に大きな役割を果たすと思われる1～2kmの歩行スケールを対象とした。時代的変遷としては原風景が確認できる明治42年から都市化が始まる昭和12年までの3期間を取り上げた。図1に示した手順によってできた原風景の透視図をもとに代表景観13地点を選定し、各時代における全39枚の透視図を作成した。

5. 透視図からの構成要素の変遷

透視図Aにおいては境界の不可視（台地上の視点位置）透視図Bにおいては境界の形状と質の変化（橋上）透視図Cにおいては、焦点の消失（河川沿い）のそれぞれの変遷を確認できた。「方向」については、4枚の透視図を



図1 透視図の作成手順

用いて方向性の確認に関するアンケート調査を行った結果、透視図からは方向性が認識できないという結論に達した。一方、小池らが行った面接調査より、河川の方性に対する地域住民の認識は明確であることが報告されており、このような歩行スケールの透視図では表現できない条件（水面形状や遠景など）によって方向が支配されていると考えられる。

明治期における景観は特徴的であり、各景観要素はまとまりをもっていた。それが昭和期には建物の増加や河川の改修によって、以前感じられていた多様性が失われていく。例えば、透視図Aにおいて明治期にまとまりをもっていた景観要素が昭和期には視覚できなくなり、ゲシュタルト心理学という図と地において、図としての建物が地としての建物へと逆転するという現象が起こっている。透視図Bにおいては、線形や奥行に関する多様性が失われ、また透視図Cに見られるように、谷地、谷地、空によってつくられる自然景観としての境界が家並に置き換えられ、領域が認識できなくなった。

6. 結論

明治期から昭和期までの透視図から、景観の構成要素の変化を抽出できた。さらに、一帯に広がる建物によって、地域全体の様子や地形の起伏が見わたせなくなり、多様性という過去にもっていた特性が消失し、均質化という視覚現象が生じた過程をとらえることができた。

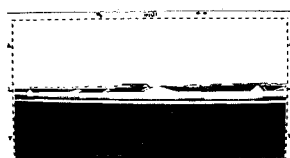
明治42年



大正14年



昭和12年

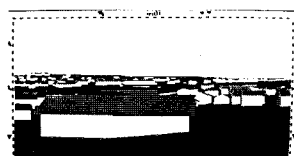


透視図C 焦点の消失

明治42年



大正14年



昭和12年

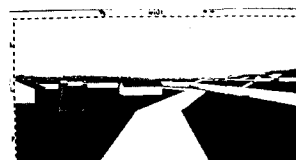


透視図A 境界の不可視

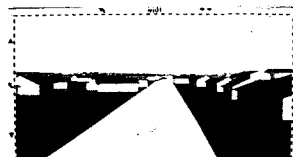
明治42年



大正14年



昭和12年



透視図B 形状と質の変化